

ハイテクノロジーの果てに

筆者がお世話になっている、“施設園芸”の世界にも、最近異種産業の参入が目立つようになってきた。生物に関係するハイテクノロジーの代表は、“バイオテクノロジー”であろうが、施設園芸でも、“植物工場・野菜工場”という名のハイテクノロジーの利用が進められ、真逆と思われる様な業種や巨大資本の方々が、それへの参入を図って来られ、筆者らを驚かすことがしばしばである。筆者は、異種産業の参入を、施設園芸の発展と活性化の為に、大いに喜ばしいと考える者の一人であるが、その行く末については、一抹の不安を感じないでもない。

わが国の施設園芸は、発足時に事業主体が持った資本力の弱かったこと、プラスチックフィルムの開発で、塩化ビニルのそれが先行したこと、夏季の高温や台風による障害の回避を前提とせねばならなかったこと、などが原因して、塩ビフィルムを用いたパイプハウスが、全設置実面積約4万ヘクタールの77%を越すという、世界的にみて、特異な発展を遂げている。しかしながらそのうち、野菜工場などの基本になる養液栽培装置の面積は、僅か300haにも達していないのが現状であり、それにはそれなりの、必然的な理由があったと考えられる。

最近是一般の施設園芸にも、省エネルギー・省力を目的とする、多くの自動化施設・機器類が導入され、それなりの成果を挙げているが、異種産業、特に工業サイドの方々はそれには飽き足らず、より一層の生産性向上を目ざして、工業生産の論理による、園芸生産の改善を提案されており、中には、園芸生産施設の機械化や、ロボットによる無人化を理想とされる方もある。

目次 (第21巻 第5号)

巻頭言

ハイテクノロジーの果てに……………1

＜(財)日本植物調節剤研究協会 理事
(社)日本施設園芸協会 会長
西 貞夫＞

畑地用細粒剤と雑草防除……………2

＜(財)日本植物調節剤研究協会
吉沢長人・竹下孝史・横田重雄＞

山形県における果樹園の下草管理……………12

＜山形県立園芸試験場 工藤郁也＞

昭和61年度秋冬作芝生関係除草剤・

生育調節剤試験成績概要……………19

＜財団法人 日本植物調節剤研究
協会 技術部＞

新除草・調節剤紹介

プレチラクロール・ベンスフロソ

メチル粒剤……………23

人事往来……………26

筆者は、その様な議論を何う度に、チャップリンの“モダン・タイムス”を思い出すが、同時にわれわれはもう一度初心に帰り、“人間とテクノロジー”についても、考えるべきなのではないかと、憂うつになるのを禁じ得ない。

〔(財)日本植物調節剤研究協会 理事 西 貞夫〕
(社)日本施設園芸協会 会長